

きゅうしゅうせいがん き かいこうじょう

旧 集成館機械工場（国指定重要文化財建造物）

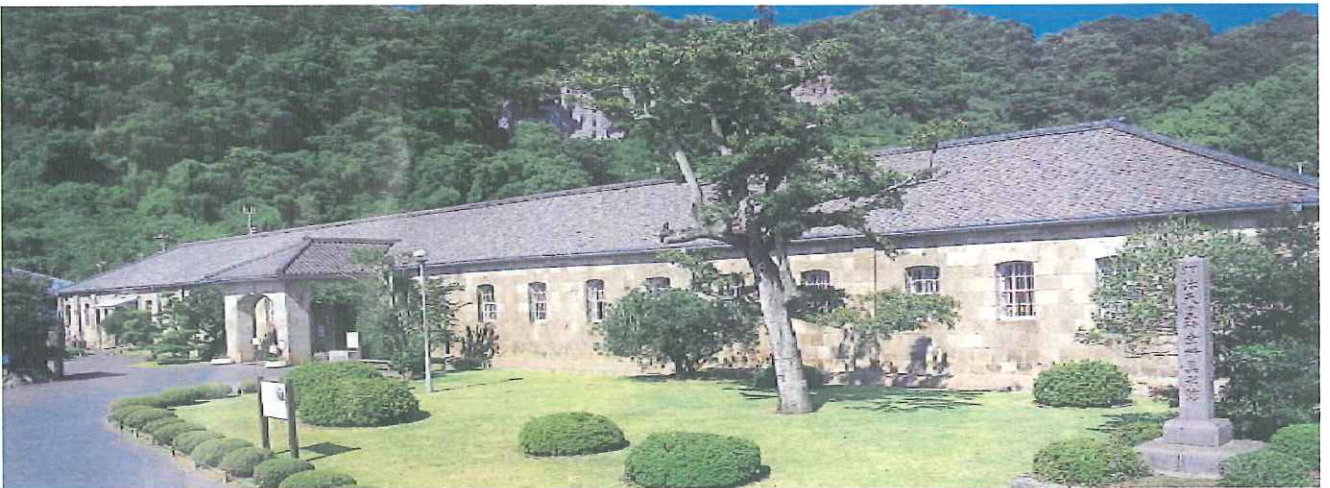
きゅうしゅうせいがん
旧 集成館

つけたりてらやますみがまあと
附 寺山炭窯跡

せきよし そすいこう
関吉の疎水溝

（国指定史跡）

- 【所在地】 鹿児島市吉野町磯9700
鹿児島市吉野町9698番6の一部ほか
- 【種別】 国指定重要文化財（建造物） 国指定史跡
- 【指定年月日】 昭和37年6月21日重要文化財指定
昭和34年2月25日国史跡指定 平成25年3月27日国史跡追加指定



旧集成館機械工場



反射炉跡

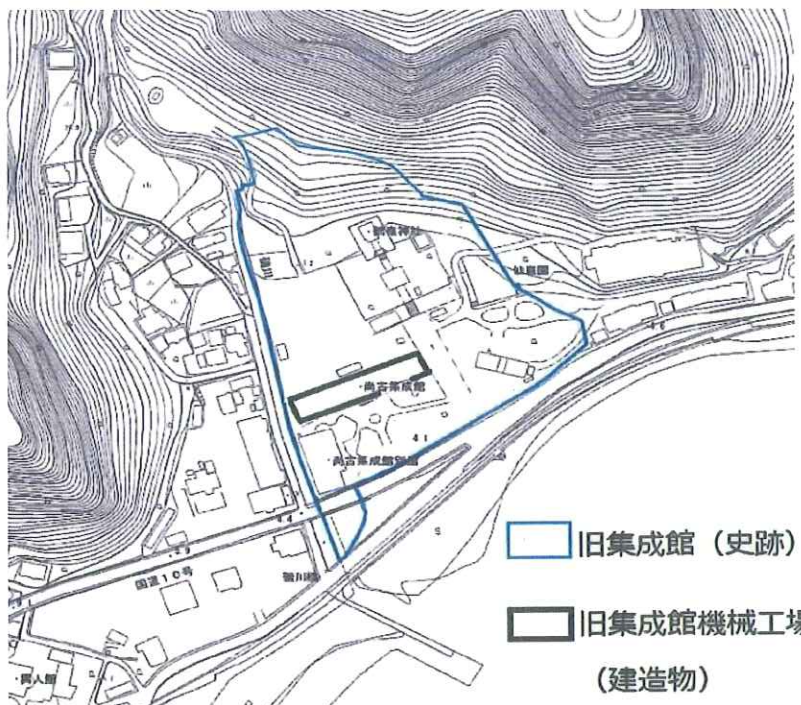


寺山炭窯跡



関吉の疎水溝

集成館は、^{かえい}嘉永5（1852）年、^{なりあきら}島津斉彬が築いた工場群の総称。大砲鑄造のための^{はんしやろ}反射炉・^{ようこうろ}溶鉱炉・^{さんかい}鑛開台やガラス工場、蒸気機関の製造所などがあつた。最盛期には1,200人が働いていたという日本最大・最高水準の工業施設で、斉彬はこの集成館を中核にして、製鉄・造船・紡績・電信など多岐にわたる近代化事業を推進した（集成館事業）。斉彬が築いた集成館は、文久3（1863）年の薩英戦争で焼失したが、^{ただよし}養子島津忠義の手で復興され、幕末維新时期に鹿児島藩の軍事力を支えた。



維新後、明治政府に接収されて陸軍大砲製造所となり、のちに海軍に移管され鹿児島造船所となった。明治10（1877）年、西南戦争勃発とともに西郷軍に占拠されたが、すぐに政府軍が奪い返し、主要な機械類を東京に移送した。その後も政府軍と西郷軍との間で争奪戦が繰り返され、集成館内の工場の多くが焼失して荒廃。戦後、民間に払い下げられ、島津家などの手で存続

が図られたが振るわず、大正4（1915）年廃止された。

集成館跡には、反射炉の基礎構造物や水路跡、慶応元（1865）年に竣工した機械工場などが現存する。機械工場は石造の堂々たる洋風建築で、完成当初から「ストーンホーム」と呼ばれた。

石壁・アーチ・トラス小屋組など洋風を基本としているが、洋風建築への理解不足も見受けられ、蘭学者たちが独学で建設したことをうかがわせている。

平成25（2013）年には、集成館に供給する^{はくたん}白炭を製造した寺山炭窯跡と、集成館への用水施設である関吉の疎水溝を追加指定し、名称も「旧集成館附寺山炭窯跡 関吉の疎水溝」と変更した。

